

宮古島文学賞の世界を広げる受賞作

大城 貞俊

今回の第一席「ソラピートの夢」（高杉晋太郎）は、これまでの応募作が現代という時代を舞台にした作品が多かったのに比して、舞台を首里王府の時代に置き、先島の統一を史実に忠実に描いた希少な歴史小説であった。

ソラピートとは、宮古島に実在した仲宗根豊見親のワラビナー（童名）である。石垣島のオヤケアカハチ、与那国島のイソバなどを登場させ合戦を繰り広げる場面は圧巻である。文体も内容にふさわしく、躍動的な世界をよく作り上げていた。島の魅力をこのような題材で描く作品に、改めて文学の面白さを感じさせられた。本作品によって、宮古島文学賞の世界はさらに広がったように思う。資料を駆使した労作で努力賞にも値する作品であった。

第二席の「檻の魚」（見坂卓郎）は、生きること疑問を持ち、自死することをも考えた少年が祖父と釣りに行く行為の中で、再び生きる意欲を取り戻すという作品だ。単一な行動の中で、不登校や家族間の確執など、現代的なテーマを浮かび上がらせた手腕は見事である。さらに無人島や魚を、個として生きる場所や姿の象徴として暗示しながら対峙する姿は、自らの内なる世界との格闘をも託しているように思えて興味深かった。

佳作の「カロールタコ、食べますか？」（玉元清）も、私には評価の高い作品だった。カルロさんの作ったタコスを食べると死者に会えるという着想で描かれた作品で、小説の力を遺憾なく發揮した作品だ。島の開発と犠牲になった人々を描いた主テーマの他にもたくさんのお話があり、限られた紙面以上の世界を暗示していた。「赤い鳥」の仕掛けも巧妙で、浅井先生の登場で額縁構図を有した作品世界など、存分に楽しませてもらった。

最終候補作に上がった他の作品には「蘇生」「凱風」「神々の宿る島」「スケープゴートは島を想う」「洗骨の浜」があった。「蘇生」には双龍神社という架空の神社を創造し、物語を作っていく力に秀でたものがあつた。「凱風」は失恋した若い女性の再生の物語だが、表現がとても安定していて、語り手である「私」の造形や内面描写にも秀でていた。「神々の宿る島」は愛情の究極的な型を島を舞台にして描いた作品で、島の風習と同時に子育てのストレスから子を殺してしまう母親の後悔と償いという極めて現代的なテーマも提示していた。

「スケープゴートは島を想う」は、三津と光輝姉弟の島への思

いが詰まった作品だ。三津の島への思いは具体的でよく描けているが、光輝の思いにはやや曖昧さが残った。「洗骨の浜」は島をテーマにしつかりと描いていたが、やや作りすぎて無理なところがあった。

最終候補作の多くが小説の特質であるフィクションの力を援用しながら魅力的な作品世界を作り上げていた。応募者諸氏のさらなる活躍を期待したい。